大野定子詠草大小十二冊の内

おほのゝさくさ

九

洋学文庫
文庫8
A 180
9

内證十一条

松本認之小冊

御会始　鶯入新年　明治十一年

鶯もまちし年を待得たるよろこひ数千年萬年
あらたまの年をほきける鶯はくもゐの庭をなつかしみすみ
鶯のまちしをつけてなくなれはたゝことにけふも鶯さへ

一月一日

なかなきはしめしより鶯来なくまりさきにうたれん
梅かえにおとる声も新しき年をむかへてはなるゝ宿
かくろちふしをわかぬ我宿の静かなる年をむかへて

新年梅　有重姫

けふそえてさくらの梅林花の初心よりて年をむかへ侍

昭和26年12月10日
大槻茂雄氏寄贈

若菜摘ハ桜井の水さらりとつみてはまた来ぬさるらん
千とせまてあそふ来ぬもとも屋ねの水あふれして

新年御寄

晴わたる年をむかへし七草も参らせ御年の寄
あらたまる年もむかへし御寄もおなしくして来命寿
祝ひ申しとりの年の御祝を申しまいらせ候

新年寄　勝海舟　書之

千はやふる神の御世よりかはらぬ年をむかへて祝ひ寄ハ

賀詞寄　詠之

賀年の万代も猶さかへまさる祝を申しまいらせ候

春ハ御年の万代の空を仰きて祝ふる寄

御祝寄

あらたまの年をむかへし御寄も御命の御祝をいはふる寄の祝

正月様　詠之

八千代まて咲かはる花の我宿の松にも祝ひ
松のみとせ祝ひなかれ山の雪の梅の木のやまとうたを

新年寄

春のやふる御代の寿の万代の年をいはふ寄の祝
寿をとのへるまての御代の竹の寿命を祝ふるや寄の命を

霜のあとぬるみてさらきの空はなをさえかへりつゝ春の帰

早春　亭子要路

ふりさける雪の光もさえかへる春の空にのみこそ春は来にけれ

新年祝　彦園要路

弱山花

山深みくれて散る花の色もなし白雲とのみ見えにしてなへて

はかなくも花におくるゝ心かなやよひの空にかすみ立つらむ

こゝろなき人のため山のかひの花をいかにせむ春は来にけり

山ちかみつかひのまつしきに和歌とかいふ

まつかきる山人の旅の空にかへり来ならし

旅衣きさらきの空をかへりみる春の都の花を思へは

雲雀わかる

峰すゝしき空の雲にかゝれる旅衣の袖のいかにやしるし

聞虫和歌

耳さむく世をあきて今朝おもふ虫のねの上なき
翠の毛ひ雨しこ来侍てとこともに一声中つれ和歌

雨後和歌

雨そゝく田中の春はかし秋のしめやかに侍和歌林
さはからふ小池の水のさゝなみそ雨は実ありと帰和歌

月前和歌

御のなり糸なすして又はなるゝ月招深く帰和歌
書きゆかしと形帰の夕歎の空きゝ月とまた侍和歌

萬[illegible]遊庵[illegible]

残りあてたるとのてらしはさしさへ小篠の外面由螢　行家

かきはらへるさりたる宿ちかれ他きさるわけ遊螢　　螢雪

滝上螢

しら玉にもふ末かれねかは滝との下おちてに飛螢のうけ

見え分る露は浪ちる滝に川くれは螢のひかり携らむ

深夜螢

かやりの火もきえしまゝさまつよるね御深のくさ螢かり照と

螢滝ふしわける深への螢のり夜を雅ちてたるとまねえ

夕水鶏

かやりの宿まさしきるつまこ白は戸敲りしたらく水鶏の

ねなくなる夕へふくるき沢辺のさころね頃さる水鶏啼也

夕螢

ほたる見る人もわきて暮ぬる竹の草葉に螢飛也

夕暮はたるさりし小坂さとさしりてに螢飛ちり

窓螢

窓のもち仮りにさまれとはかなるさきて緑

窓のうかれ軒のくらさにそれさへ乃子守の山子校

寄月恋

積つてもいはて知らぬ物を雲風も志かすて来るさゆる月哉
霜まよふ峰木深き山雲の下枝にすゝむ月をさえたる

枯野

むさしのは野守の小竹もかれはてゝちる種さへ残るさかり
前おはな尾花の袖もうらかれて蝶のねのゐる頼なし

初霜

宮をきいさゝむ萩初霜にほころひ初るむめを未まきさ
初秋のよりそふ霜の上に置霜の消ぬまに初霜
初霜のおきいそきしけりつゝふる里の月のさゆる哉

深夜霞

待酒もみかくのつきにうちわたるおもはれけむ 実平家

雅和殿

山のはに霞てしらるる行方の夢の枕は雅和らる

春の夜の霞をたとへは雅そ雅子る有しらぬ實家

兼光達

春子の実し夜はのしらぬ霞まてのましいつのをを

いかならむ夜はにし見れ月の影つかふしきにはむぞの

霞む月来るにほのかのたなひける雲そはれ

深夜霞

うしの出ひさしはしらる人の枕に板屋の上の霞衛り

なれなたは枕にとね風の音のまとたまにこゑる小夜霞のかれ

冬雪

雲たれふもいはぬ夜まに山まへ西山に深さまたの霧

木枯に散るは残る雲の雲枝や見にしつもる雲峰

冬雲

冬月の夜さいはまぬれるは雲またつる深雲衛り

降つもる雲に白しらの冬月やさと吹風に雲の雲衛り

冬松

木枯のさそひし跡もうつさこそわれの雲ハさそハ
さうらふ

除夜

なやらひは鬼をねらふ代ハむらくはつさ跡をかなはん
ふらん

われらねむ来て今年をとらふ社ハ去年かな
てらし白峰

寒夜吠犬　服部嵐雪

拳の跡はゝゆる声のうさえさゆる夜風を負ふ犬の傍も
防ぬしるまゆらねぬを添しき、来極の月ニ夜犬の声して

右清書

月ニ彫の名月の夜ねもうのをこ寄ね去社白の狂し
名も知ぬ名はぬしるかゝるや行賀保の名月ニ寄して

寄竹迎陰

松も添ふハ身ハ月竹に寄ひふ苧稍下と心も

猿之渊ハ

ほつまかはあゝら渊去の一言その絵しらてだゝの声落

さゝらえを丹らきにつゝきかし伴の中洲よ生ひとらふ寿

遠寺鐘

はるかなる山の峯なる寺にて初夜の鐘の音
仏の誓ひをつけるとてたえぬ声の夕ゐ

弟子の宮里静清のこゝかけられし

千代ふくむ宮所の雲といふ也松は常盤の風の色
松かひさや千年もふくむ宮の松の緑はゆたかなる

夜恋

ふる雨の音もおしまれね夜な夜な恋ハいや増りぬれ
わか身たに恋をえたれる枕かな恋のやるせのつらさを

稀逢不絶恋

あふまてハ会ハねとも我中ハたえぬ契を君のみそ
ゆるさぬ我中川の橋代りつゝたえぬ絶なき

絶逢恋

中垣のへたてし身にもまたあふよはおなしわたし

恋の歌

いまさらにこの柿をふくむ夢の中ハねぬるのおもねの床

まちわひて今日も雲霞これぬとてゆふくれをまちまん
いふかひなきかくは雲霞集まるに人なしとおもひ候ひし
来遠く契る心もつくの宵ならねは恋しき何とも覚

くまなく衣をとりて
来ぬ人をこひくらし

何ゆのたつのきる身にも衣にしらせなかくとものか御て

忍絶恋

いかなる山なるやなにはやまに絶の思ひねをなたて
うき名人に知らせて心のいひ出しねて絶果てなり
やるせなき

ありし契り
絶えしは

此身はいつもる宿に絶ぬるこの身のなくや人を恋ふらん

はるかに絶恋の人を思ひねはしらしともなきらはし橋
人の心は傷つけしき我か中にはいつも嫉妬と宵宮覚
きのふまてふ絶恋の人をまちつくしいたつらの外に清なまて

明治十一年六月十六日

大概の[illegible]のことを論じたる

抑ちかきころの人のよみ出る歌をき
のふとふいふ[illegible]
いふべしとあり

此方ハいにしへより世をおさめたる君の道を千代の[illegible]
[illegible]ハいつの[illegible]八十[illegible]
なき[illegible]
[illegible]
[illegible]

作歌をよめる人の[illegible]
[illegible]

随ひて声のね作りたる姿の能よく
なりといひ伝へたり
或しいふさの座頭はさしの歌のうたへる宿に泊りて
さきのうちさきたりしころひの座頭のあまた候ひし
藤澤の遊行上人にあひしより
其の時作りたる節の声よくてと
いひ伝へたり
平家の語りあまれは御弥の作之の書に記す
語の其の白ふらうねのまは嘉吉の代の書に
月に其ふ沙汰せる代は語の其ふ節々やう伝

に於いて之に節ひし大夫の之のねも定家の代の節
一節りはりて語の其の声のねも定家白ひ
之を知らさの節をとられたり
平家の語の節は語ひて社頭にて語の
節のあまねらきの節つたへりつたへて平家
節を語りて語りて横笛を吹けり
之つりしを申す
其の家の横笛一節りを吹て語の節ねらへ

明治十二年

杉本の小竹

明治十二年一月一日つとめて

はつしらとおひあけしや宮ゐさへるそのゝかまに心地よけれ

ゆたかなる御代の春をむかへまつる人はいかばかり年毎に

　　一入の御ことぶきも新年祝ことを

人ならば我まくら床にこもりて今年もつる千代の初

雑子の加々ゝよふたすやらうしと年ことゝなるを祝ふなる年

ららひよな熊ここやくのわたりさゝ年わたるのを祝ふなる年

　　社頭梅

ここるとめくおりくの御のあれなる旗なる斗に葉る梅林

神山のそねの笑みさしつなる好梅引ここふるるやくの花

社頭霞 一月廿日 小出云

ことしよりのどかなりけりしめ縄も風さへ今朝はおさまりて宮の
神路山千木のかたそぎ霞こめゆきかふ人もさやにみえぬそ

宮中若菜 同九日 為子云

御園生のさわらび出る時つかる宮のあしたにつむ若菜かな
係るわかなわかしおもふ山のはにすみれつむらん

採桜 同十一日 桜会

あつまきよき年の下を自ら筆をとりて桜のちる
桜林をわれてとりかへ見りて若菜の指名しをるなり

雲井友 十三日 久子云

桜なびくき千代の友と契りねと雲井に今朝やすむ宮人
神代よりいくよの人か君をしのぶ雲林友となるらむ

新年祝 京の玉露

あつましき年をかぞへの山路探るやさしく霞の衣やすらかに
相応しきよしのゝ山もまたもとの宮に年のかさねて明る年の春

新年宮 むかし 服部貞

あつましき年の始めにをさまれる宮の務めさへ
さておもあらしとなふるたまきはる年とともに君が代

新年宮 十四日 ちか子

かくなる雪にゆたかなる年の初ねをいはふやく人も年の始

来る春と霞の空に先めけて春西ゆきゝ新年の華
紫のちし好子
わかるゝも知らて待つる年の来はいまさらにそれとなくて年ぞ明けぬ
新年鶯 松会 高堂
生いそめし心もこそ音もなつかしき鶯の声
木ずゑなる春のあさきに谷の戸を出てこし鶯の声
待ちつゝも猶ころ梅の香にほふ宿よりとはする音を
雪中若菜 久子 高堂
消のこる雪の下につみ来て若菜たにつむそれ華
降雪のつもるね猶いかにわか若菜の袖のつみにけり

和伊鶯 十八 淡木
おや子のこひ来るとはうちとけて初音をなしくゝ鶯
春くれはわかれしも谷の戸出て来年ごとに初音
引河梅
引寄りは袖にも香やに梅の花ひこえかり初のにほひそむ
春宮殿へ入の中のしのふ深き白くて梅もわかやさしね
社頭朝霞 二月 松会
神さびし神の宮居のみ積れる霞にさしく年
神山のこなたの雲もこえねむて霞になるらむ朝あけ
引河柳 二月 小云

色と香をしきおもふる春梅の亭主をこなて人のよする
藤とふきとしは柳に日影露かるゆふ人まち来宗

廣露　二月　汲木

こえうの浦の廣ゆ入り重なる浪浮さへ出くる露
わすれのことはちるのおけり桂木は露のこころつく　うれ

山新宮　二月　久子

こやこそは若菜つむへき松と松山こえて新宮本
舟とめて小宮の崎りとへこえは山吉て新宮清　うれ

山ふ

かやうの袖ふる山新桜ゆくのさし山桜句ひわる

紫出谷
降二月

紫新あまりわくる谷の戸さかり柳は藤とわきは出かかり

采座梅　京の菊生

梅もさてわくる春はところに座静に葉る梅来
つきしと又よむ宮の葉さしはつ春この新風の初む

新春陽　京重信

心ゆくわかる春しるやこそわかの陽にこそいるとこそる八
来やる谷のおちのさ中ゆくるやこ大浪の春の浮保の

新雑　服依菊

春菊のこ露と来し山ちひの雲京ところとき浪峰る

ちらひ行人もまこらね紅葉の露わかると停車

岸之松　涼木

角田河渡しらぬ松風をつゝみの松本のあり〳〵
様ちりい寺ち結ぶ本のにけつゝ自ら宗の松本〳〵

旅寿菊　梅舎

いろ〳〵ときこえて旅をそふ松梅も名もみなのあ年
まちかの舟の松にも停てこ雨をいも袖と露かかり〳〵

見露　房子

風薫る梅津のまわりの春露も年にたる人やいつまでものん
跡のとことをかりる寿すまたも露りとらいかりのさそ

庵借　房子

庵借ことに守りかさまで一筆の戸をゆきたれことのも石年
宿待にも寿経りてあさ月庵庵にしそかりこの行

花之月　つる

夕立の麦の葉絵を生じくてものもわてまおも月は朝
らおつてもしかりけて月ほとも寿ふかゆくのり宗る

野夜鶴　龍子

かりその野夜の舟わかさしつゆこね鶴のこそ能とな
はるとこゆの野への若菜をこらずおさらさるのぞし

漁之夜曙　勝信翁

桜のひ枝をもてことさら舟に心ものせる春の山本の
うらゝに出る佐保の浜辺月夜に浮きはなし春の野

岸款冬　為圓

やよいまた春のわかれやこゝろへき山吹の花にうつる岸の款冬
岸の山吹の花にうつるゆふ日の影ならぬ春の日影もなかりけり

岸山吹

引とめよ船わたしの岸のかげにうつるやまぶきの花のいろ

窓　花

夜すからわするゝ花のかげ見えて夢に春をとふ窓の月

梅か香のかほるさくらの窓のうちにさけるかほりもねさめの花

山家和歌

かやぶきのかりの宿つきし西行の我山桜白ひとわたり
ふるさとゝなりし昔はしけれ桜も山かぜてさそふとしなる春
山ふかきつくばのみちを待つくしてかの桜さくにてえやさらむ

いろは千之巻

新年衣　家の要路

春はやし今朝は衣をとりかへつゝ我おもふ人にきせんとし哉

空しきを衣きつゝ春にしもめぐらぬかくさむ身

わすれぬ年を人の衣にからのゆきに重ねてきる

行末流の霜ならぬことつる春おもひきてるとしらぬ

一月一日

霜路あらたまる年立かへるやのとなるらん見

花鶯の音その路本の花ならぬ方の年としの哉

おやまの行とむつくまねの宿より年やこそきらん

杜路雪月つらね

神山のふもと河は月涼し唐茶にも霧野をき
涼しき風のふきくる神山のさえたる月は霧もなし
　枕好集　よみ人
ちかくは我とかねたれと日毎にかはりゆくよは枕かけかり
かはらずの〔?〕ものいはぬ袖かは雨夜にこそ行は枕かけかり
　露様　よみ人
我宿の枕ときまりし露ならは山路の風と草をもかけ
まさると月の影ともさしかはりける宿は枕にしのぶ露ゆる
　寄枕恋　読人
あはしのまゆ頼みてねられるは菊の末代の友垣枕かけかり

たまおのそれりはおもって風葉の枕よりたる宿にそ〔?〕ふる
　露中鶯　读人
降つもる雪はよき哉我のかきつきもしくとや鶯の声そ
鶯の声きくをつくる声ならて雪はいふ音にもつけつらん
　新年雲霞　読人
おほ年は春立空の霞のかよひ日影のこそ雨露舞おふ
　待鶯　読人
来る花の木は花のときに庵しのてもてなすおもえ鶯の声
きくそふる杖まちかねてもくるよりも声をね鳴くは杜鵑もまね
　雲中鶯　読人

鶯は峰よりおりて山まての雲わの若菜摘むなりけり
峰つゝく雲わけさそふ鶯のあなたにきて鳴の鶯

河辺霞

風やふく谷の朝日も霞にけりかは瀬の河の
若菜摘む秋のみちの跡す川つきに霞なり

春之鶯

あさ日さすのゝ雪さしつもりては雪の関鶯
風莫ゝ梅のさく鶯はうさし軒をもまて雲の峰の

早梅

鶯なくゝまた雪ふる信夫なる南表の梅のさく梅は

梅花の風静かやまたかをりて梅咲さへあかちなり
おかきのきしての袖にふれてはまつさきに梅咲くなり

雪中雪

よしさる梅は春またさへ夕山の春風強てつもる雪
峰つゝく雲のさへかの梅のねさへ吹ふるらり

梅 詠未

なかきのしの袖にうつる梅のかをたれしるや人のこゝろ
庭あるかとはの外山の雲の葉かくれて梅の香なるらん

梅花香

なときをにほふね梅の花の香つまれて袖に留なる

かはつの声ゝあやなく桜の枝はらゝとちる八重咲ゆかり

秋霧

さえし秋は深くなりゆく秋霧か山の青く滝なりけり
ちりかゝる紅葉の枝しものゝと霧て遠き秋の夕暮

松在家　小出

詞して文よむ窓の書秋の夜も更ゆく河ともし火も
昔いつもあはぬ夜の信るの床にひとりゐの涙　さそ仮なり

書之窓

咲ちる桜ちらしこや窓書す枝くれて窓の命よ

河辺霧

庭やいつ今は掃の紅葉ちとに霧となりてに名るこの秋

雨後桜　ゐ子高家

雨そゝく桜のいろはたとへても此世うつるの名残てもちりて
春雨の名残の霞も不見てく白く河の桜木伴楽

遠山霧

さらねたつ也霧こめの紅葉山の梢のいろとまつ霞の秋
薄墨に絵かきしものゝ山もちて霧となりぬるをちの山

里紅葉

いさゝ小川の流れの紅葉のひろふにつくみて
かはつの声かかるさまの桜はこの紅葉つ散にけり

わきよりつくらしく春のゝ錦はおもきは雨の花ならん

家花桜

よる人もおしむ心の香桜のいろも宿をとふ宿の花
我庭は桜のいろをしふりてまつ外のつきなかりける

菫菫草

春もやよひ桜人をさそふ我宿にねやにまてゆく人の手
ゆかしきや花宿をまつかの春をまつ春をまつと

若竹

まかきにもえ出るまた中ゝまつかよしまた春はきの人の庵も
八千州の野ゝは老の宿にまたれて春は花にせうとえ

桜のはしめは咲始とぞしらでてしるべきも人の若草

暮山霞

若林の霞は衣のきぬかけは春山中の暮れてまた花
来れの後のきぬかけものと春山暮て霞にかゝる

野若菜

水清き沢辺の野の時雨にあまたねをりかへてつまんや
いさゝかはまた春をまつの春まで野辺に若菜をつまし

梅薫風

風にほふ軒の梅の香も風よりさそふまに薫る袖の
かしこはさ梅かゝの梅薫る雪の下風にほふこの花

むかしわかぬ形見の春風も桜さく庭ハくもらしひかりそふ

山早蕨

けふもまた人しらぬ我山蕨をるよしもかな
露のま我山里の和蕨のあつまのふしをる跡なく我

故人恋

いにしへのともやむかしをなつかしみ家にハ山桜香も匂ふなり

山家春　ミ子

山さとのさくらの春のさかりすきほとゝきすまつ花ちるなれ

旅宿蛙　久子要蔵

かりそめの旅ねなりけり浅茅生の水田に子蛙鳴也

夕ざれの名所の庭に玉簾かゝる月影ハ夜すがらに不案

或ねしかもあかすさにほふかほり憐なまて振ねて今

待花　源景

桜木はさきなん花ににほひをまちて我心をも知らしいつはりたのむはさきそめしとをき山のあなたかな思ひのほかにまたれける年

花下忘帰　松間

こゝろさへとゞめおきてもたえしくも東ねる家人は帰るとも心まよはし待ちて千代もあらんものの心あさ井

惜花　晴

花宿の花やさそふねしく惜むとそやつさる住み来見さゆくはやきのあかれし惜むは散れしとめて花なさのさる

住程は旅とも見えす知られしいふきのたれ
桜咲く露ぞやかれ木坂を隠してつゝ心よすの空

芦夜月

歴代もさしにえてこの月の影さへよのは夜ちきいりけり
水枕さ流れの下陰の清月秋らもちよし秋夜ちきにけり

風前蛍

河原の沙くての小草成かる風先こそへて飛ほたるこの秋
吹風しきそ行来なや入りぬ細道の浮ひおもてる飛也

梅雨

しめやかなれは才もしく晴ねなふいつ日降つゝしたらさえて後の雲

山家雲

さねこもりふもしよるとも隔つる我山のともはすにちかき
南ここふ都山むかりし都よりて様川のむかしより命わかれ

深山手枕 次

夜半に来るちかき笹さわくさら深き山わかれ一声そきこえ
夜もすかて寄る来ぬねのまくての山り命わかれ

手枕

墨染の夕山雲のこゝろくてそして雨りなる夜と命わかれ

若木仙日　服部甸代邪

結ひし夜のしまわすそいてゐかしのくて宿ふきてそしつ

河上夜月　服部菊代弥

ちかひこそ末ハ人の心にも夜河ハ月夜涼しくなかれてそゆく哉

杜若亭花　〃

ねのつきてこそりし松かけ神山のこゝろしらしと秋をまつ哉

望擣子

あるのにほひ咲句ぞ花夜深き空をしほりの梅かをるらんの花

黄鶯白川の岸の鶯子のうつり之露ふきハなかるらんの声

雨後夜月

おほ空の雲の上の雨ふりしあとやさき晴し夜のまた秋月

夕ぐれハとく涼しきやらすれしかけしる月の影

和早紀

耳さくさせきひつまつ生続夜も知りたまゆらね和歌なれハ

たのしさをつかさの花を分て手なれ人の作れたなれ世のわね和歌の

大月十八の夜ふけにほひすまなを年つ

松服部菊し世えしま人作にハつきなけ

こゝろにほひとの和歌を世はしらくのひゝ

とのいましてかくらしこの人しといちの外

たまへるまれなるの

まことうつも情よく和をかさやしてあたなるこね和早紀

杜若亭夜　服部菊

露霜の身なる名の月うしハ心あてさしへき夜と侍き
来路し涼しくたのもへし夜秋すつわ夜の露霜

新竹

こゝ衣ゆすこゝ新樹の若竹とふりよくの秋生ることなれ
さりとし文よむ窓の若竹とも日影初冬に近し竹ある方筆

竹裏夜月

風そよぐ竹の葉末の月の夜さりし夜とこゝえさる竹の
坂の手すゝしさかさの竹の月に涼しき

茶子夜

あちこちのこゝろの窓につきに一声の子規筆

水枝さしつきこの露の木下にも雨まなるゝ日と命子規
夜こそ

くなつかしのこゝ雨のねかふそもとの葉にも夜風かくさるゝ
子夜連

竹の枝つきにわかみん木末の夏草のある夜半の君の思はる
ほと涼そろの風のある一声に露のなるしもあるゝ風のり

雨後子夜

雨の月そゝかゝるわかやと様きうて命子規筆
わか雨の名残露なきに木下こゝろあれちゝる子規の根

名不大月雨

網引する海人のよびかはすこゑも程遠く浦のとまやしかなの
うき寝の夢をさゝれの浪にさやかにみつのこゝろも浜ぞさき
夜之雲
かくてねし筆のつさ人のをくるやをかへて書るゝの心をいふ
雲路夕立　服部菊庵也
夕立の雨はおもしろいきつかけのおもふて引ての雲山
雲霧もなきをさとされぬ第ちの山夕立雨を降らせける
旅人の笠もおもくなりてきつかひ夕立雨のおり侘
河辺納涼
かゆすらそのまゝ行く道をさそる河つきぬ夜なる縁

河辺の紅葉程風おこへ春のさき上手なるその秋
家々あくるいつまてる夜のをと旅寐をつきし河への宿

月寄虫　雅枝

虫の音も雲となりにし浅茅生のむら露そゝく月の影哉
雨ともふ月ハなき野辺の影まて露にみゆる秋の庭哉

暮秋月　〃

宵の間の雨ふりはらふ月影をさそふ浅茅生の野辺の末まて
夜はふかき人ハかへるかな野辺の月を見れ

禁庭月　雅枝

久方の雲ゐまても猶ならはしの九重の月の影
更けゆく宮の大内山の月影
おもひやる心も月の影

あきらけき大内山の月さへもくもらすてらす代々の
高きのゝ雲井はるかにたちのほる雲ゐの庭の月をも照らす
公家のすゑなるはかくて雲ゐの庭にすむ秋の夜の月

月前虫　雅枝

ゆふ月ハなかそらにて夜そ寒き虫の音にさへ
虫の音もたえてさひしき浅茅生にてりてさやけき月影

風前和歌　雅枝

小萩原わけ入のゝ風ふけは露にかねさく花の
立まよふ秋山の霧の底代々に寒きる風のみかはす
小萩原わけ入ののさまや月さへて夜風さむくも花のかけ

萩露重　ゟ基

野路ゆく萩の露けき道をかゝるとも露
しけくさくなる萩のはなのかたへの露

萩下月　雅枝 雅望

霞とりわけゆく月影とさえさえて野路の
夜をさしてしのへ人はかゝるを

月前萩

清く秋やまかしさる月影の萩の露を
月影の夜寒にかゝる月にかゝる萩の

為紀

夕まくれいつも心のかなしきは野はあきならてあはれなりけれ
こゝろなき雲のなかにもひとつ一本のかつらもたえすおちの家

秋野露

日数へてたまくらにおくねやの萩夕露にぬれてたゝ袖
まてしはし袖にこのうへかみをおとせ山のいかはかり夕露

萩風寒

秋のきも野はしめかたきの下にすゝのへし萩の下露
野萩にまたうかれていかてたつる萩のしのひ露

谷深霧

深き谷汲みしりてふかき夕霧深し谷の水[illegible]

秋夜虫

野原になくおとにきく萩の夜はいかにをとめの声もなく
萩の夜ふかくもならの夜にいかてか秋をなけきつゝ

竹虫

秋まてはいかにもかきかな我宿の人まつ秋の竹の声
竹なかの夜のしら露の月にいかにか虫の声もかなし

故郷月

たかきのこゝろ人こそすゝ故郷の月のかけにみえん
こゝろのうちの行末もふかき故郷の月はしるらん月の影
やみにて夜のくまなく秋の月は[illegible]

一 都りて哀とうハ旅ねの一夜くハあきの夜ねつき

寒庭落葉　服部

吉野山の紅葉の中の庭ハ落葉の山と成にけり

錦のこりあきやまの庭も人跡て哀なる

冬林路

紅葉の錦もつもる林路を分て来れハ冬の木の葉か

夕落葉

庭の霜に白し夕庭の紅葉ハ風の音と来なり

冬霧　久子

いそかしき朱のたまきのかけともさたかならてしくれ降る
露をうけ晴ゆくと見る山までも日影白くて雨そゝくなり

渡時雨　つらゆき

あらふきし波のおもてにこきわたる舟よりも時雨ふりもちて見えけん
あのうらの遠のみなとの渡しられすて山の端遠く見ゆるなり

橙実如金　ゑいし

このはすゑ陽のたまる実は照りてさ桜花もおもひをまさる
おもひつのさとのかせてこそ見る人はさぞかしなるらん

宮井秋来　孫舎

いつのまにか宮の拂ふ秋風に梨しきて人やともに来し

ふかきゆきさそやまんのおもて分けて人を訪ねける

松之雪　源末

松枝に降りかゝる雪をもいく度か寄せてつもる雪清
君来の山はしらつゝくなかつの中へ西に入りつもる雪

野紅葉　某

奥山のもみちは毎日の葉のいつもおもひの外に染にけり
木枯らしのもみちの野辺をまたてて袖にかゝるに野にけり

庭氷

墨田川中洲のこのまに生にしあさきさえたる月てらし見え
河そひの芦ふかき影に風さえてしもまたきこほりそめにし

いつの年か衣麻さへかね見えてまつ山の
衣さへ夜は寒くしてかの衣風きさむるの床

冬山家

家山は雲とゝるかねと鈴人まつ道にて冬は来らぬ
草ふりの中はしらひぬるやこ人我山家の物をわすれ

雪中見ともろ

吾かゝね相の雪積とあらわれの中ことを深くかる年
深くの吉代々まよひて物思ひつもるより心の中にの深き年なり

冬日 前の南き

大淀の人の足はたえて冬の日はしとまさに物は中なまされ

晴てまた冬あかし夜をさへも中年りつゝ日数へしるしなれ冬の旅

冬神祇 服仮着

人の山かねの袖に降りつもるしはあかりつゝその河風
やゝ人のうきの霜なかにいとめものなかにし

名所千鳥

津浪の吹く夜ふきて風荒くかねすみて千鳥
あかつきの浦のこゑに風ふきて千鳥鳴
吹風くて浦に経て霜くも袖しの浦に千鳥鳴

浦千鳥

浦かせの夕おもかけにゆら袖さえて千鳥鳴

浪の音も風のしらへもおなしくはあかしの浦に千鳥鳴也

霧くもる浦の東京月冴て雲にかくるる千鳥なく也

冬雪

里遠き冬の松原いかならんよしや訪くる雪のあ[illegible]

忘れ井の浅き清水にほのかにもとはれぬ宿は雪しら雪

なら井の杖ころもむすひてつかりきりとまりの外に風さえてしよう

いしなるおやのたかきに尋ぬるかさこの杖もうけける雪の[illegible]

新和歌

巻水のおとも絶せしよりわきにも人はわれは[illegible]

今よりは御所の浪の上の新歌ふきおくちおもねをも栞

雪千鳥

千鳥鳴雪の汐風月さえて浪のしらへもおなしかるらん

風寒みこしとくき雪積る沖のおさへ千鳥なくらし

炉辺友

冬の夜はなき木枯にさそはれきてしつの火桶の友の[illegible]

もかうちわか人の宿にともちきてしつのかたまりてる中人に

暁千鳥

暁はまたき月の影さむき沖へ[illegible]千鳥しは鳴かな栞

いこま山の峯の[illegible]霧こえて暁かけて千鳥鳴也

寒中竹

窓中竹

窓の外にふしなき竹のよもすからつもる雪をれ
志る宿のつきかけやうつる枝うちはらふ竹

山ニ和雪

吹はらふ嵐もさむき高山の峯の雪ふりつもるあさきこゝろ
ゆるゝ枝にの枝生風さそふ和雪ふりよるすゑ
和歌ニ詠ひ風静なる夜の月山ニ和雪さそふ

寒竹

夕霜に雛のかさ色にかり竹のさむけきそ
おくる宿の夕霜つらに結ふ宿の下竹

不逢恋

木枯のふくる夜ふけわかまちし人はおとせぬ時のかよひ
はつ月にわれしとのゝ雛沢江のさそひ人のあふよね
何をまた身をくらして逢夜のさそひるきこ衣笑声

逢恋

人しれぬ我思ひねのつれなさつらひて身をかよはす

逢後変恋

契りしも逢夜ね今はわすれなきに君をうらみて身をしるも

不二山　一月　松会鳥雪

唐土の人さへかゝるふじの詠ハ筆にたえぬひたすら山とのみ
覚へしかはこれをもつてしるもふじのねハ和歌にも心をはなれ
ぬるを筆にかへりと寄する事になし俳諧日本の字ま

直可上人のおもきは衣をとゞめり
無水しまる家を母にみとつのおもひらまて情よろしく我
これを世のおそきは旅のわかれをもおもそまよみ字ハ郷しきり
河を宿とさくる旅衣にかねてころしつゝ計　桑

旅衣

旅衣つまねてとめて吹きる気楽ましくさこつゝ出り

貞之の家にて六月廿五日といふ日ころ
うたよみし
衣手のわきて[illegible]すゝミつゝやまとの露と[illegible]消え
京　わ泉式部
名を聞ぬる我身[illegible]の[illegible]の[illegible]京わたりも[illegible]
月日[illegible]に[illegible]のゝしハむかしの京と名のみ旅[illegible]
[illegible]
若菜
若菜ハ[illegible]の[illegible]春とも[illegible]
庭上初霞　十三来[illegible]
初[illegible]雲ゐの庭[illegible]ハ[illegible]

家族[illegible]庭に初て若菜の千代を[illegible]友と集ぬる
人もなき[illegible]雲ゐの庭と我[illegible]千年を初て[illegible]
久方の雲ゐの庭に初子の千代の[illegible]新露
庭
ときは[illegible]の色も[illegible]庭も青くなりぬかゝりしと
衣々の若菜[illegible]として晴霞て中[illegible]の絵
不[illegible]書
筆の[illegible]引植て[illegible]の末ハ千年の松と[illegible]
[illegible]
わ[illegible]しの花の[illegible]人のつね[illegible]

らんりらうは浮多りの人のくみてこそ
たとねらもちなんなるよきにて多くあつかひて
よろこのいまうをなれいろかくいにて恨く
ことゝものらへもあつかひいろなれいろくらう
りわりなる人の何ろをさへさらてさそりくた
ちらふちんとさしくちさへのあつくのしりて
先一つきのこたまくやなつくさぶしまへく
たらしきそけるをいひなれい彭うらきよ
はらから我をおもふものもあつかひて阿のそ何かいふ
若宮ぬしの山口さへのるくもはつのせふもてふ何こののしる

つねりきこえたかき人のよしあしをとふらふれは
これ聖の寓さいみそこに鼻のある宮天狗の口のさきうさ
おもりおもひしらるわけそいひそらし
法人の子こつらん行きあふるわさと云のうらくは此の宮よこの
あくいん
又らう殊とこそ行しなと
宮殿の御殿にらうの御前さに見たりのとき此殊あれ
ある女友らちこりけるまま房重よお女
の歌人あるに宮人となる宮子はらうこのみて
形ひかのさふしおもひて一夜そいふきい
衣あしくやとまちいねらひらしやそるてさて

にしへよりいひさだておのがおのがをしへつゝ
しるしぬ詠人字かゝれものはしるべなり
まちまち法とおくれて世の人の志なれなり
なれねらぬことをさとりえていつの世に
ありて学ぶときあしきさまにもたてさせたらぬ
ありては何をのいひやうもなほしくて
たゞそれ皆よりて学ぶ人を新たに学ぶよねさせしと何かの世を
千歳のおほはれ伝人のあるかなりつりの一代ハいたりしけて
そのなる学の師をあやまちてこれをいたらくなきおかしき事なれ
宏淸　右歳路一月ころ守宣のくどて

月をちよ楽しき友とたのしむは詩歌人となりけりとこの秋
こくしつる者なるは恐るるを学ぶまの友はおもひ見るる
竜のりうこゝろ人し
元のる所咲身みん成りきてこのくつき花の詠を
咲身ふもあらやるとなくにて学ばらのは何ことぞ見
源之信敬政　明治のりしこゝろをて
女なよもちにそれある事もとちもてし言を以の露と元結気
宗化新民　内女学校
新宗学校その心をそれてしたなれにゐてとかくるの式の秋
いに　余算

出軍の声ハしらね樹かけ旗の靡くと見まかふ

大嘗祭

宮殿ハおほそらにかゝる新殿の御ことなるこの夜

三條西季知公のよませたまひしとなむ

詠める　八月十六日也

三條西季知の大宮の御祭に陪りて奉れる哥

人なしとおもひきまつ神の守りの事に雲居に世の月のいとも露

よくころう新年

三つの宮の御よろこひの御祭ともいやしきことの神

御殿中の人のみわかよろこひのことしも殿の御まつり世の名や

菊　服侍菊の第二の月…といはひて

大方ハいかなる空もつみなくこそ祝ふらし元日を世の祝

菊こそのうるをたなきハ菊の千代の栄えハいつまでもなし

唱歌　服行人の哥をしむことを

[五]祭事の[九]なきハやハいふはかりうるおはふされ[六]ちくさのかくし[九]さとし[五]給衣

[九]こゝもやのこゝろ[六]かせ[九]はいゝはひてつれまほし

三百首かなし

ミつる事なくしもなく変らぬやうなれ共ことのしかく
常なり人々とも此月計は人の心も静なる事なるへきさ
ちよ事なりしては常様の人も様々にはなるへきもまへしき
もゆかり思ひてこそ両宮しそのわかりなるさまとは
君守きも行いは候りもわれかめのなきちは恋つれ心もう
後なる家にしらしたる治の秋月なれはいかしく人の
らるもおちるるきのうし来ぬ別をねてるとみつり後ま
也ちよきつうしうし世をつくまうる人おちのり常なるわれは何
方でものかいりまうなる人ありて歌によみて常世も法るわれと
りしさは月十日余りなるといふ日しててらり様なりし大宮の

五のちかくは銭なくてはかなはさ月の雨三十日余りも降りしと於
やまぬうちにわたくしらもちかくもあれは雨風にて
又たえひの歌をのせる所縁升をうるいかなるあの
子ちまねかるをりる露このちさへありけるてあかるさ、
られいはてしも我が家のあかりいて不るもなく又ちまねい
ちまの女男あかるるこそは々としてあり歌さくつまさてしの
へ是な思ひにほゆるやうらし雨風のありさまのかたと
へこうしあの真経にい銭をわりこれわと以子出る斗
りそはかりなるか人はなし出るらて十五とつ日の節り
たかきのまねらわかりしいなしやおわり去りさるの

この大樹の人々出つる斗り人ての
前の女房らの此のしるしの津まをなひる所にて
云ひあるさいるもあはれを何らして心にいさかく
ありひあかむさとてるやうはわれたとて心はあむへき
人もかくあいをはわるの知る人の身なれをくも
なき人々をいかにてこそさわれてかくらて一日二
出ぬるは高しくを出しる人のやるこなれてみゆるの
東の方をさしてるをうかしこたかねあるく所のいひある
り何も思うて出ぬ思ひてあるらは所てしのうて
いふ事あもいて人さはかなき思ひ後つるまかいてし今は何

なにはもこひろきいまとこのみしかさここしもなかれて
おもしろきところのありし日まつさへ二并りし生ねおのゝき
ありしころのわれ君しゆかりし今宵もらして見え夜
あのまへにはなしにかこのふこのねりしもさを枕にしてねる
わしもちて立たれは心かとかりしとはふしもわよりいでし所
その兄をもかりて帰りしかさまこえて君しこそらんと見しきさ
引つゝき出りし比しこそゝ力くてこのわたしも心かゝるものかく
しれて入そ君もわれつゝて君しかもねとこしこそまし
なりて出りしこのかなしことしも君のところを待てり斜
あるゆゑし生しわかれ給ふ定めしおもひの雨風はやみぬかなよ

心ありあはれしもありしちからわれ君ありて心かゝるもの
かなしりしわかひろおのゝきわかれしいてしえこそなりし出
わたくしこそりし雨風はまりしさのこのふ枕きりし入りを
まいこそなに入と君のしわかれそいかなしこそひこひ
まちりしふはなりしもとも見しこそやわかれひえさらはおのれもと
ますまえんなりしいかにをこそるわと枕未雨風ありしわれ
らしわかひのこゝろ玄影のゆゑし君ある来るりやみて
雨風玄かのこゝろつゝみしはわかひつけにこそりし人
あれそわいろはこちれさそ銭つゝみ来りそわかひつくりつ
さしたるおもしえこそりしもえわたりしやかの縄してて

たゞさしあたりし時のやうに草子一つのせたる箱ありけり
なこのなしかゝりけるかしこきかたいはむかたなし
たゞの人ならんをだにいふかひなかるべきにまして
御足をさへ身にしみて拝み奉りのいとゞしくていはむかたなきをのなしの
様も心ありとなむ思ひつゞけらるゝにあはれいはむかたなき
なほなほ人やりならぬ涙ながらいさゝかなりしかくれなきのこと
忍びやる心もなぐさめかねさて人々つねならぬなごりにて
ことわりなれどもわりなしと思ひつゝむかしの
にほひしも絶えぬ人にあひかたき小夜ふけて
うち(?)涙もつゆなみだのやうにもなりぬるかのこと

あはれなるもをかしくも様しげくやさしきあらはなる
ましきは心やすきにいさゝかものゝあはれの
まことのいとゞ心をしあかぬあはれなる
なしとあはれにいかに人のかなしきあはれの
このあはれなりしてさしてやさしき
あはれなるいとゞいよいよ
さまざま人のかくれたる涙ゆゑ
つねならぬもてさはきことのいかにしたるもあはれの
なのはかなくてさるいかにもあはれぬ
さるしこのなしかのあはれにさし

つかへし宮の御にまうことかなしくはいかならむ折りかある
しのゝめこそたゆたふこゝろに心しつかにて宵にはみ給
ありわたりしにやかてゆかんやうにそこそねしうり
て後も我の君をおもへる心しらるさりしにはよしあるら
ろうくにこそみるに神ねおもはゆかるしらくのかみ
なるらむ我はしのひてこそおもひ心なるらて御心なりけむ
し宮出けねみふともうちなれしもあかねあり我の御帰り
けるなきしのかた我君しのこそおもひ給へかるんやなさい
へやみすてきみなかてつてもさしけてさへさうやきぬ落なくなり
あはれこいふの便しみてえこそつゝねさうれとし我のかひ

て萬ならふりけるをあの中ゆるもさてはいかあらうけり
へゆしきこゆるにあましもそひくるさかて心あるるらし
おのさしいかならしえてこりてふてひあさんとあるり中ゆるかぶ
のちをもわしくもちて我はなくしこそはいひてしらなりにち
てわくてこうし斗める我は御竹なるさこうくのわりをはゆ
なし宮のおもひてや宵代斗者をりえてえくらさなくはこうらの
まかせまー夜あつれとつくのかくさとのさあひまさなてふとし
のいつれかはわらうあの萬あつくさらしとのらひ深し中ゆる
さしこそあはれるゝらのあるし志るしとちねえて中ゆる
みけあつなさら我あのなしわしらくのうとも高うもち難しさ

こゑつひたるおもひにくらへてわかしさへにさし[illegible]
さゆらくの八橋にかのかけいおのこしいかしおもひてんさらぬ
やうしけれはおもひの人といふ[illegible]のてし庭池し我
ふかうこころうきをもおもふ男のいねかうらくれなう人
讃とおもふ君のこしおもて[illegible]いるしこのまうし人
ねくもりし君へしのひやうにふをしるつれいさうしとおもへれ
てなれとさうしいところし
ここうすあつくるけ[illegible]ひもゆきうしやてたましひをあつる
ふれ来のはきなき[illegible]けて我歌すふつくまねてしる[illegible]
かりてこしもうまれうすおくなゑ[illegible]ねてあかりし[illegible]

これいをよしる人うりりを滞来るる君のしこのかよ
ちしあをなりん身ゆてさりとい[illegible]しのよしも
のかうあまりしつい我にあくへんかりしなつかしうう
かなも思ひへきいれなとわかれてしいうすみへうれ
くらなるとて東ちしをうちかうへ人まるるしちこの
らのくあらりうね心をうつく歌うひて
たのあくし信とおもひし木ちかる絵ねくゆるさうらふ
そあうりまてうつらいしりて
あつくのふみうくし枕をし高くねうらね[illegible]とまへりうて
このあらくしてつれなはおもく身ゆうかる人てらうなへつる

のあるまじき心にまかせてゆかりの人のもの[illegible]しくなりけり。

小桜の[illegible]ねつねにこちよりけるの[illegible]

らのちかくて衣り[illegible]こそ[illegible]

[illegible]心にかゝり女はまして[illegible]てさ[illegible]

[illegible]たまへる[illegible]の[illegible]

り入を衣とも[illegible]これの[illegible]人らの小舟[illegible]

[illegible]たま[illegible]てらと[illegible]

[illegible]にいふ[illegible]のにはかに[illegible]袖つ[illegible]

[illegible]のつ[illegible]

[illegible]のよ[illegible]

[illegible]

[illegible]ちかくるまでさ[illegible]一夜ちの[illegible]

らのちかく[illegible]からのを[illegible]

[illegible]我[illegible]

てらちかく[illegible]

[illegible]のこ[illegible]

[illegible]

[illegible]いつの[illegible]

よ[illegible]

いふ[illegible]小桜の[illegible]

給ものゝ法縁しへいまいりのをまなびてやいつまゝ心のみにさかりし
けるまゝのふしてらしこの身成りて鷺多し世の中の人舟
さうさきりさみの人つ渡れるわらひといひしかの木のうらぶれ
里人のうちゆなくる後つつし舟なりら高まわらひしまゝ
引舟ふあしらひいかがね大まいやうろる出入して舟のやうにら
たらむしかけしなれて舟をよそおるつこてうち舟のゝる
渡の浮のうしや小舟の渡まうへ我らうのをまつうて行ゆく
舟つまやかたなかりへわつるふとうやうしわらひの小舟
りこなしわつゝてふ給ふし然世なる人そわかみとゝ云う
父
あれ求りと立くる浪をりくるゝそて押しくる河ふうし行

余りのそさ浪くゆるの河をはしわたしと舟人の本くて
けるこそねいい人ふ又ゝ給いをゝらもちこのもちろうこなより行き
山の河の小水有りけるうちう一節い小舟のえさうかりけうち二節
有り西時うちゆくわたしまうし斗心かうこの人てゝ見の事
こうる来るゝうもつねなる国ゝの大河と生まるに行くて之一斗
生河の舟う小さしの川このゆる方渡しる外二ツあり
渡ちのこ給ちなるまうて人の帰くにいらしにうねうゝ
の本にう入てわうなららひわしとそてさうていうちの木
ていらふりうる河りしわらひの国うの河と生まし宿
りしたうさてねうりなうしてるやうしのかみへつとおもわれる

おもしろし、かくてこの人々やうやくのるは江の深さいふ計
あることゝて舟人らくるしみあへるもやのみかは
くるしくいふこのうへゆきかへ一丈あまりもあるべしといふ。されば
つゞきねば舟いだす夜のあけぬれば順風ありてその主人
あまたのこらずよろこびさゞめきていとあはれなり
船の中の形様を見るにも舟出すの時分まではなれて
時ならねば只舟よりあがりてはなれはさるところとあれ
そはあるこの夜何りしもあつまりて酒あそびもし、ことゝ是
侍者のこゝろも夜のひきてみなのしる人とのこゝろもみな旅
路はいかにならむ人々これは何くれのやすくいひて

そぞろなるたよりすらなくて心地のそら
といふ事もしひて其の心をいふことなれば、心しくは
やすからしるものなるたよりなるもいてかうもとわ
ならひ来りまた旅をうこゝろはなくるはなはいの
りしもさこゝろ給ふにはかなは心さしありてやくさしはあらし
ゐのさくありて其の人とともにちぎりかはすくはふるの縁
なん出で夜あつまる人といふこのいとほしありとも絶ゆるとて
さてかろくもりくやすくこらんうはしていかにもとれり
いかなるとかもちのあるつきのたびにもとはいらの小舟
りしなきこゝちこゝろはなれはほうりねのうる出かけのくるしけれ

たらひといふものをもちゆくに其のはしのやうにあしのかり
くろうすゝめるかぬれたるやうにあまたなはたるに
あまのこぎすてたるなかにかくてあるたるの水に浮
さゝわかるにはこそんと侍りけるをいふかしき
たくみなるさまにてやすねるをたくへて縫して又その
あるるあちりあはせりおりえて小舟なりにありまとなり
たゝうけとりへてるまりてもちれはあるのいろの中をさし
しつをあくものはさまりきにいふてもありてけるよ
こわけはさうか大海とゆきてあら川原のあちてあは西に
たひとへて大江と来て縫の方へわたりてゆくるさまあれ

ちはをけてきいかしもあたゝねつゝゆひるのこにしかのあ
つみはまのりしなりともゆひたる斗のことてかいきにいひさき
あの人の家にぬふるまゐるにいはしあやへちゆくりしね
柳戸の実にいさねらゐいるにくあの人のあまりみえる人
あつんやとのりしも仰せて志ける実ある大のして君いたるて
けふの柳もしも来る花の実にいつかんとかへてもたし
なり静心なるらしていとしきてし
実はいたる柳戸の実はあのつかにてもつれねゆりてなる
なりなり舟りのつて侍るとなるらもうあるのふの家居二冊
りへてつなりきちのしわをそれて君のなりしちらね

なをいひしけるなりし人々いふ事もかゝるしるたゝし
こゝろにしたかひていふ舟のうちやなにいひくしなを
しくしちれゝさうるわかちていふらくいさゝて見れは
かの人の家まへいとなかくひしきの中にありけりなと
れいのちからのうちにかゝる此の人のかめのかいのひて
いかゝりの池のこゝろのいまひそて宇治にし
たえていさゝかにいふ梅の木をうへていかにしてと
ゆめやかにおもひて人々くふ家のもとに梅しける
ふ人ちかくにまかるかへりとこそしかしていかにし
うるもにかゝまつもむかしこの人はいふかし

水のほとりにあるかの池のこのちかうに心ありけりとしらん
しかれはつらくねもこそいふ事ともありし舟をつなきね
人にやまといかにしるをかしくし（又市落）心しら舟もなりしたる
の人々いはむたえたるをかしきかなまたは見むやりし嘆ね
こゝろにふかゝいてにやまとしるふかるかのたゝ池しける
なにをかくいふかわかにいきしかるんこゝろよしてあるへし
さらてかゝのはそのふたかこの心松わかきにふかめのうれと
かくらんといふていさゝかの心に繁かのにて人もちかくるね
かのうへにものゝけりうまこのの人々にてけり我この
たゝなほこのくもりもまちしんなりなといふこの花をおもひし

いとさむきまゝしのひておりえねとうつくわさ忠度か女と
おりえし忠度かわさ〳〵たち衣にて袖をぬらしつゝ来
まちふ舟にのるとおもふらんとたち衣とそしる
すゝのおもなのさる野おもしりとさいかてきよらにけて
やかしくいのちつき来る舟つきわさにおもふらおりとふ
ふとかしきれのれ出るゝ舟のさまとみひたて必ずをきことて舟てし
りるくしにおもしまへしなをしぬ来きるらてかり
おしく時のわたるふなうらおこのたくくし志やまさかし
さまにそつうにまいるしにて神おもく来わさしくいの
やきたる夫ふりにまけたてものしる王ものとそまなつり
一わらしへて京いつりむていふつれとさしへしてわさいまゝ

上ロ をおも文言とよりし舟のま

こゝにさそのうちやおもかたとくろすしやこらくねまはこつこしこう
てやとねふ金のさくしまてにもちいくまちるとく又二つまた
とかふいふ日もし火ゝしるはるれてあひらといふさ
まるし中の人あるさねく人ておうらひてもたぬらてらう
おもむいし山とこらとそくしりし中ひのおくのうらとくし二
小金のさくしり来わりねやとかくねるおもくてさらわちかり
こゝかりこのおお着鮭名のとくりしてやらうる小麦やといふる
りもいふくおくろねさまかりて能清し高のとりあくつる本
のいわつてかやおもく年月なりてあかれこのお人ともさみやや
おりしこなていふおもそのく故年来る人てゆめいしいへるをも湯

あさまて酒くみかはしけるにつけても山の端にかかりこの
たえずこれよりもちかはしねさしのまへやいかならんかやうに
なほまなねもしらぬ狐ほかくまゐらするからのちから給
人あらそはれずしてむかひのあるかといふさくらしつる
さまりしてくはしやかねへて来りおもむひて見えかくしいふて
ら給あらしちひこゆへいまいくらりてあさきなきといふ
りしはしけ心あらしてさるものにしてむかへてあらい
あまりいふちのうへてかくもりしこなるるしみのみ
たからいなをあそよ山さくらちをかりてむかしのへてあるう
さゆゑのまへのいはまやしいのまさんとえへやあらむかれ

くるちこ筆のさしてゆかりそのうも心つきさんいのましらう
やうしらてりしあらしやうらひけるわうそのに人てまゐる
されかり小金の京ちうく米わりて寄の大樹のうへのしね
まかりのふ必うちの雅文とあるおめやうらちあらくのおうさの
にるのひりさおらくこのうらね縁ぬけしあらくいとをりしやく君
あわるは心あらし
いさしおきその安きも心うしむのおきて母なきおもに
いおえら我らうのうそのうらてあむのひくてえたいとく
この人あうくむしやさる人のふからうりわくさされたの筆
も心おもりかりてあやあらくらくし京ていらうてこれいはいやう府く

以下るまいも又ちかし右中将あつし所多くしたるし
能くちらされさて給ひさす御前りく候りて又しここ候を
いふねとちさきのむかひのかつしわさねるくし
まうかふ雲のらかしいそのあれちつしと深山本こうす
は京のすいりねく後松本宮入くこのちつるりして京は
るるのふ京りいらひていれくあひらのまくのあねるる
京りいふりね己るく年りそよはつるしうるねすのるを
ろとうち京ちりしある船清わもきねさす時入くるも
りく御りしちすきよ御さと以ひさつくういつしらちくし
しるめころと以く久やらとく武田わりのらいしやかう

除ひりきい仕まりしてとくつく人半給ありくるうり
いれともれちうくろあらめのいくうとやとりしり長く入つく
所はらもちく出てもちのれへりい何のふとの以本をるつく酒
許のれ松くせられい入く松くそのりの酒りくこうりし出る候
しうわて評出お乾評
神くにもれおうちりさいたらひの出年限くつるぶとひきも
御前りくれくとこね車い家ねりくちのりね我い治さくとも
うちあむすれるさいあたえいてくえこうしく一り年ちあむ
にちちおくまわさくあひくあうと家をようおもて
うれもちのりくうくくとのりかう御前とく京そ半やう

ゆふくれかた引舟なる所にいたりて子をなくるもの人あり（小松の里　ゆゑある人の）
かくれゆくこゝろ舟よりのぞくにたひしにはしはい
きこえくる舟とゝもにいひてきこえつゝこゝろありける
のちおもひやりてあはれとおもふにいとゞ嫣そのゆかりの
いふ方に何かしらる涙おちていとゝ切なるゆゑあまたつ
宿ふるき人なき家のうち倚ふる所にのこりてあはれにもいとゞ
湯あみなどして床の上にいくとせ伏しつつ病をもとむるのちに
私はのこるこのあはれのいつもきこゆるかたのこととてあはれ伏し
ころもの舟よりのぞむもいへるあるいはきこえつゝ
一夜とまりて舟ならんといふさゝふちのうちにひとりさんとて小金

あくる今宵のやとりなるのちにいとふかくありつゝ舟
よりのぞむにいつも人あまたこゝろなるのこゝのありつゝ
のこる宿ち又ちかう山中より出てこそあらねて
いはくる旅人のことぞかれゆゑなりけるつゝ
獄てなる歌を詠める人のこゝろもうかゝひて
うき衣つゝ涙にもありし思ひやるねのなかりきねさへ
心もなく迎へ給ひて行き後にいろいろまきつるよ才
あはれに心つくしてのみこそおもひめるにあはれにつ
このあはれのやさしきこゝろのおもひそこなひのみあはれにも
きこえとゝもにこれのあはれのこゝろにかさはれはて
なれはあるこのことのこうへしらてはなれて悲みのなき

くつろぎ人らのいふりきのまえて舟のちりうまてわるこ
き〻たる時は日数へぬまても[illegible]ほど五日余りたちのぐ
ちりぬれはうみへたりしほとに西[illegible]かへりは河こ
も[illegible]をおくのつゝのほとりにちるかれるかし[illegible]
うるおく[illegible]ありけらは河のなかれにて[illegible]ふりきと
人らのかゝる心とゝまるおく舟人を帆おろさてはいかう
[illegible]ふりしたるかの宮にてけさうへしつ[illegible]
舟さしつゝ又は淵りりのりこゝ舟人らのは[illegible]ふ人との
うるかのまうて河辺へりつきにつかへし舟やらまき
むらしのぐうつはわるまちのしらう舟つなぎそ

ゆきありけは二夜泊りは二夜いふしらねかはみちゆきて
うなたかたらるまうしたのしつまいふの[illegible]かの[illegible]
なかくしてうきけれ河辺にも[illegible]のまへ人ありとく
さもありか原にしてまつのほとりほとりありきこのみる
りし河は[illegible]人にいひもちさては家ある人あさき井のほ
の所なつかしらはよねま人のこりとやく来いふ
ゆらしありきし春あさ年心たるのくのくきらはともつく
まきのみゆきありてこのやまたるとくいふは此のたか
りてし[illegible]よ[illegible]なる[illegible]らんといふまゝ[illegible]まきこ
さらありきしまうもをよとさへし[illegible]たゝまつりちひろを

つら〳〵一つの年比しはしさまてもねおもひの恨みはいとちの
くるしかるへからぬ身もあやと思ひつきくらしては恨見よ
りけ月のさしたる影はいとさしくて
見れはいとはかなき波のたちやすみ出たる房の月
人くもさえし月の出たるにはは恨やさ〳〵舟のうちくて
いさねもとてしる比さもらさらはておなしり人のこと
なるかの及くさしこらてわるかいと絶しなは我命
ひのもちてのやるをきちすたのこる君のこその命ひり任な
おもひを契りきちの世とはすれねまてるりいさこの心おち
ねね云て形木我いやるのけ君ひもらし此君と命ひみる

おもふさねは人ていつまてもねられすといまて恨深く殿は深
し衣の袖のしめりもいまたかはかねはことゝいとゝこりしら
うりおこの世まてろ君のおもさしのへぬる事しらうてみさ
偽りし君をはなさす我のみりむさかをゝかしさおつちきに
ねうりなきのしして世の末といふあはれさるやといふて
舟をあちかちて給ねさのちかひたる人て契るしらね人
いさか房のこの人といふの昔をつちかりて三年とも出
なへうまうあかうつくろはて十六人とおもへかたをとまとの
とも人くいらちをまて補ね恨さてわさとは人てまち
ちまいせさゝいくさこし恨みをうつゝしやのこゑ

そのほとりにて小舟にのりたる人あまたいはば人なんとぞいふ
かくて夜は、あまたも遊女どものほとりにあるか
比喩にていかね来ては水のいろの色のにほひを見えぬを
そのうちにありける人大かたさかりてそのうたをいひけるに
瀬戸わたりける人まつのうへに人まゐりて瀬戸わたる舟人ち
必ずいとよろしく来といひてのるにんよりいはれさかしさても
ありけるは遊女どもをおりて松に人に遊びける事ね
ただ舟中の人のまうさぬかひてにのりける時はなやかなり
ければ瀬戸わたりける時はちりそむる舟つなぎ
てあるにかくしてふしぬるほどに又舟にのるあの

うるところはいはむとし山に来るあかつきに小舟をいだし
ありしにくよりはあかひくるを来りて行くに所にいとひ
に小舟まかねいはは浦の人のすみけるを来る一の
そのうちにかくも月のひとありてはつきのやひのはしりの
ほとりやまして見るよりもいとひ遊くねかとさまし物語
しるしらぬのれりて又らの宿をらは松原をとひて
ようれぬのあかるあかりとみてまかねかしてかく
ね維りさまに浦辺のまへはまりてのよし
たらしあかりかいしひて松原の浦のそのはいつるとみ
あるひのうちに浦まくはひとしあれこそまた瀬戸をたどるを

松本のいハ二字の障つかふるにてよしといふ人ハ京のくにまちて
何ともふりこそいかにも多くのたくるこの世ちねにそ流
子といへる所ハ京伴りて世よりたちよらるそおもふ心は
てつとめるにそハ清風ありにそりのねかりといふ清くあり
心さたハ舟よそそうちらハ涼しくりて京との中よする所
くりさしていハ清くある所つくり来そりそのふかりた
清斎なとありくつくりさて江戸より四さしつる蕉翁この
ふびの宿ハおもひけんとは京のかやまきりわたりて消息
やりて其のふかりてハさる人しられといふの後に絶しつ
うひくりゆきよるかやの以て翁蕉ねそこは法ふりしや

此度ハ何事もしらせてきおりといふはわりまてこの京へ
わりし心にそこの人の庵に消息そえしそをりかれは
まもなくやりきりしそハいかなりの世をわすれはこたくの京に
其しむかしらりて去の勢そりそとく蕉翁のいつれお
京都いなりしさるをいつる旅泊からりておのれとの遠方
此名もかくて梅のすりすハ人消息持けるかその
あるをりつくおり以よもあつし蕉翁来りてさりて旅する
京都いかかわりおもひける此みわ事ありて梅の手紙
さていろひの事ともしらぬやそいひてくみのくるよしと
引くるよいとくりて四てこのくしつそ結る木のゆかへる

たかねおもしろくては いとゞあはれなるにつけても[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]打[illegible]の木をお[illegible]て今は[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
はこの[illegible]一[illegible]蕉子の[illegible]旅[illegible]

の[illegible]十日[illegible]
蕉子の[illegible]人[illegible]
[illegible]心[illegible]心の人[illegible]
[illegible]心[illegible]蕉子の[illegible]
[illegible]人[illegible]旅[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]

いとおもひけるまゝにかれのこゝろを[illegible]てみまほしくおもひし
ふるさとの人風早の藤子がもとより
水鶏のしたはるゝつゐに水鶏[illegible]きゝなし
なきわたりしこゑのまゝに[illegible]
我はその水鶏にならひて宵にたちわかれたるにや
されしかばものゝ[illegible]思ふ風早の[illegible]
なき旅の路もおもひいでゝ今は[illegible]
おもひわするゝ[illegible]つきしうて[illegible]つゝ行の
行ことの[illegible]つゝ[illegible]心の中にて
つれなき[illegible]人の名の

いやましひてこゝろね我が身にかへて藤子のもとへ文
よりて[illegible]今さら我はも心をかへて[illegible]
[illegible]藤こそ[illegible]旅人の名は
あらは[illegible]藤子のかたち思ひて旅人のあひね
のこまじりおもひ[illegible]今さら[illegible]
しらせまほしく[illegible]人しれぬ[illegible]このこゝろ[illegible]この宵の
[illegible]人[illegible]ねをきゝてわれは[illegible]ひぬ
[illegible]のこゝろに藤[illegible]きこえしといひし
[illegible]にはありけむ人の心は[illegible]
しらずて[illegible]の名残

はかりかたき心ふかき人のあつかひてかくしやすねさせてある
ものなりけり宮にん舟のありしかのちてはるかなりきこえさるまる御ふくろに入てきおきてみなれりきさかのころ
このうへにも一首はつれ思ひてきこゆるにも名ひきまて
ものゝ人にもおもひてあはれあらはて計といふ名のかつらに
まつのみやとて人にもその事任し成計にはさ魔
まつとなる棚つきいはあらまほしくなりてあり前の名残の
有ありかたきを人にも随ひなりけれは不断をはれを
おしはかりにもまきれにも入りてはいはの中にとつる
ほとけ猶ありけるゆかりの記にて小前のちね
歌人の思ちかひにもなくいねのをのつまにとかゝる

人のこゝろをもちたるまいそのしるしそひれはやり
てあるかのつの名おもて名を取るかに入て人てやさしき
なまへといふ文字わいは清ちある常ならおもむきたるこのを
おしはかりにし須の古やそてすこしのふかき生半もてなし
ちのこゝろにも接みるまゝて越ひてこの魔かきこえぬ
されはある人の様なるはさまりの時をこゝろにおもひなつ
そうて捨これとなるは
大翁の遺流事まさしくて様かたりおきかれて
なまなしき様とはま裁の文露なるまゝ宗丹の
しきかいあるゝ言の筆のいはせ梅のつま部この

ふさかりもいとゝ物かなしかりけるを見いてゝけり
添ふ[illegible]人かと[illegible]のおもかねのうちのしかれ
なかりし添ふわかるゝま[illegible]なかしあまねくさ[illegible]
あわれ[illegible]にけりつれちのかま人のあはれしらう
たゝさらんと[illegible]かくおさへてもあるへき哀う
と又[illegible]やるまさしあるうなし[illegible]のつまし[illegible]
[illegible]ありつる[illegible]人もあるに[illegible]やそひにし思ひて
ありけるしる[illegible]ありけるにも[illegible]
しても[illegible]のいへは我[illegible]さし
たゝ[illegible]をものつゝねの[illegible]て[illegible]のれの

秋松風[illegible]ふき[illegible]の[illegible]のまさり仲ゆ
こゝろ[illegible]の[illegible]ね人来[illegible]花なる
[illegible]しく[illegible]人の[illegible]心あるのたのむしたま
さる露で[illegible]と[illegible]のこの[illegible]竹の中なる[illegible]
の名十[illegible]入る[illegible]菊なるの[illegible]
所[illegible]とある[illegible]と[illegible]たく[illegible]の二つ
の[illegible]この[illegible]いつ[illegible]下より[illegible]なるし[illegible]
[illegible]あるれおもふ[illegible]の[illegible]
[illegible]ね人を思ひておのこの[illegible]のまくてそ
引[illegible]名[illegible]つくれ[illegible]人[illegible]

あらそはれさいれ我の心しらる人すしあはれ法なること
せむ人をともねがふらふにね人のおのれのおもはひ
てまへのものしのふらるるいはれもまさるれのまく
きおもはくたよれるれつるるよりもいふと薪ゆて
まさすわしの水くさいの波はらのことは人なる人のしお
おもろう生まれ得しゆふしろかおもひとらくろく
ろそとさくつるこのひとるしいへておのれのえころしう
のたれおもふなるしるこのいとねらふのさまに心何のいひ
あふるてやるねさてとは風情ことてあかんとも何事
えころもとくしこのしらすへかく縁る人のいとらこらひつりのり

龍かの光薪子おもき子のし久しき心さし深き義あつひ
ふかる恨いひて小金子頭をへて出にける薪子もらう
えくるさまいへしともいひしこれ何のあいもやなし
まちのおもはりしらて来あるかる人にもおのろの
おろさ生まらうら将年の小金何ゆ次くしおもいひろ
ふとらわり人のあはれともあわかるらす生まて意くし
ら然かのふとくしおのれのいさこの小金のしえくるこち
さへのうものいふとせし生まのうし波のうくえのうし
しへちつまいわいなる独りと火かくも母しらねおかうち
いとおもろうしさるわくて舟出ねといそしえむれとあらう

妻となりし子この娘の父の手本まさしまねてならはし小笠
おのれこそして行衛といふより妻の身のうへにもちし行方
ふそのくりなくいこの事も身の上をかしやりなくといふ事まて
下又小笠をまくへてこそね丹後をさしてまゐりてさうらふ
宮へいふは又一夜ありてこれる紙へてこのちへかりて
きぬしなへりし来る時いふつしろる時中ふりふとふひ
ちつきらに銭出さくきねとらひねの料りかとわるこのやと
いふりの藤よこのりおりほとしさいこのことのこの人さ
まりしていへ年へ行りしこのしおらはやいこのとたえふ
むさ妻ともちへてしらてよう丹のてうのこ日おつる事

の時にありし所なる舟かへ［丹なる］つきて浅江をさして指し舟よ
ふかひしのひてここへ
いつそ出行おりしねよなさるらへ人しをへ人まかり［さこの］
かのつまふかくしこのらしわすれをまくれてへ莵
集る

寄竹祝　竹林ちしらす

萬千代を重ねし青竹林にそのねぬれいらぬ重なり

寄竹松　生きさねれ心のかはりなき松の林の竹松のえ

子日竹　生ひそひて千とせの春の子日に若菜つみし人の千世の例を

竹詞　おもかはる軒端の露をはらしつゝ竹ねをとむる詞の錦

栽椋
竹篇　たゞ一ねの梅の枝ゆへに香をとめて来鳴く鶯梅は咲かなり

雪竹霰　雪の杉人の今日の笛の音竹の子ぬやとて霰ふりけり

寄竹月　たれにとて風さへ寒き竹林をとをむねさやかに霰ふる月夜

夜梅竹月　竹ふかきよりも住める人もなし我山家の竹林夜の月

梅香
竹道　ふかくのみ宿るねぬるころ引き入れ梅の匂ひ風

入清泉
竹枕　大竹はたゞわかれなりかちの音傳ひ枕の宿りにたえぬる

雨中梅　たちならふゆききの袖におふ梅のかをりに春雨の降る

夕立　口なれしわかれてはとをよそにたえまに雨もふるとなる

梅　春風の吹かねの香月よりかほりぬのくちもおもれ

窓前梅　ねしとてもおもふるまもかけの梅かほりなりをれ

若木梅　たちわかきこの香と見て梅ちかの窓にかをれる

禁中春雨　雨ねかれかれをふるつきねの雲のそゆる春の雨

宮夕立　ちらかの春の雲ふるの春雨かをのいる大空

夕雨春　大空はもゆきし人をゆふしもわかれ春の雨は雲

宮垣草　ふるわかれ夏のつゆちかをしし草咲くともなる

雑　雲の空の影とちる我か宿の花とふるの色の咲

花間　人に待とふる春はふるかをの影もかれやとらん

早春氷　時すこしるて体きて、はるになれこの春とさへらぬつらり

若松春　汀たちて　まなれ　海の春に体のをたそかり

松上霞　春はまこと風かかくし山との霞はかきひかれ

梅薫　たつ袖のしろかならせて霞のかをもかたふしいて

霞隔春色　いはまもやのね日影し霞まれ春の色をかりはほし

　　ゆくしたまも　月の浪にり

　　日影のさし　なかれく

　　わたしちにはに春の垣ねをさえのをきて雲のかけ

早春にて　汀の氷とけもしに水ね水草ときて春もすなり

夜春雨　春の夜のあやうに雲の月は文なるに夜はふるかり

霞隔春色　きのうまて春は下汀の庭霞はるの色しなりける

風光り　かみこのそらくつかさもそて口舞春の衣をまかへ

松風静　松ふくもしつかなりけり風ならは人のこゝろも澄まさりけり

春来未　春たにいまたわかくさを来るはるのくれはまたこそまちけり

春之　なかりけ　一とせも経て来ると我なからおもひもかけぬ春のしり

おもしろの家の集ニさて　松かけに宿りそめつる心もておもふにまとふ身の秋

春之名日ヨ論なりけり　一日ニ宿とはかそへて何ともたえぬと思ひてもと

松陰風　浦人のつりの綱をとりて浦風にうつるいはほの青柳の床

空らしひとおやまのかけこそわかるさくらはちるをまたるゝ花のさかりかな

秋は松　神のなかに月のけしきつきぬ松の葉ことに心ひかれ行く

庵之露　宿かるやなたの水のなかくもこゝろやかなし露をいとはぬ

旅中春　のそけくはひ床る旅まくらつま恋まつ春をまちけり

月前露　ゆひさしてそのおくしつの露たる月のみねの露をかくれぬ

竹燈　夜もすからあかりにならぬ松の下とし月をそのかけそかしかなり

心静　心のうちにおもひのこすことゝもやみつる山の心のしつけさ

谷猶苔　咲きぬ花のおもひ出てゝ谷の苔にしたゝる露

古寺雪　庵のそとはすれて心ひかれて雪かけ積もる夜半

之冬衣　かさねる衣をかさねてもふゆの夜の衣を

尋紅葉　たつねてもたつねし秋の千草もおもひさうなり

旅宿雨　降つるこゝろをおもひてもりいまたおもひやるらむ

竹内雪　さしわたる人のこゝろをつもらせてさそふ雪の宿

信思行　うつろふ人とおもひのつもるやうにたえぬこゝろ

寄松前　あひみしは雪のひとふしうしもなきはなの空

霧間月　たえまなく月のかけそ秋霧たえまのはれ行く山の里

春月　[illegible]
一[illegible]のわかれ[illegible]かへて[illegible]の[illegible]

春風　[illegible]
[illegible]風の[illegible]を[illegible]風[illegible]

嵯峨山霞
[illegible]山は霞のわけ[illegible]

春[illegible]
[illegible]松の春風[illegible]春[illegible]の[illegible]

[illegible]
[illegible]のまれ[illegible]

山路雲
[illegible]山[illegible]のわ[illegible]

鶯入新年
[illegible]の心[illegible]

庭春雨
[illegible]

月前梅
梅[illegible]月の[illegible]

霞　[illegible]
[illegible]春の心[illegible]霞なり[illegible]

和歌　稲荷社
春[illegible]の[illegible]山[illegible]

寄[illegible]
[illegible]神[illegible]心[illegible]

春和歌
[illegible]梅[illegible]

[illegible]
[illegible]の[illegible]

松間花
松風の[illegible]の[illegible]

花[illegible]
[illegible]の春[illegible]月[illegible]

名所花
[illegible]の[illegible]の白[illegible]

山吹
梅[illegible]残[illegible]山[illegible]の[illegible]

三日
[illegible]松のさ[illegible]

藤[illegible]
[illegible]の[illegible]

夕[illegible]
春[illegible]の[illegible]

不升庵 一夜さへのけしきかはりて春つもる雪のやのこしかたなり
深雪花 さまさし深川の岸のさくれこそわたる雲雀にそ[illegible]
春新[illegible] さららひは[illegible]とろしし山ふかみ咲らぬれるたんぽの[illegible]
春雨 引つさて若みどりみつのその[illegible]のやの[illegible]
春月 おのかのなこそき[illegible]袖にこえきて[illegible]
[illegible] 色とをきはき[illegible]のかまつ引ゆくは心ま[illegible]
名所霞 松原と[illegible]和泉山やがる[illegible]
宿春月 本こに寂しくる春のよき月いかとるてむかしかり
春深夜 仲らし[illegible]て[illegible]のやまやこれ心[illegible]
待花 さみねのきま[illegible]わ[illegible]かねは[illegible]の心[illegible]
[illegible]の[illegible]のまつにのかりて[illegible]
ふるきものさ[illegible]心の西は[illegible]
浅茅 おかし[illegible]の[illegible]
丹[illegible] 丹人のたなの[illegible]につるの[illegible]
林[illegible] かおる[illegible]林[illegible]の[illegible]
茶屋[illegible] [illegible]にふくるかの引て[illegible]人の[illegible]
庵下[illegible] 我[illegible]の[illegible]庵に[illegible]宿の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]花[illegible] [illegible]ね[illegible]
[illegible]木[illegible] [illegible]のかはの[illegible]
[illegible]月[illegible] [illegible]の[illegible]月[illegible]引人[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]

[illegible]

竜の浅瀬の[illegible] 川[illegible]月

[illegible]

人[illegible]月[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]月[illegible]

和手[illegible]

[illegible]

舟[illegible]舟[illegible]人[illegible]心の[illegible]

[illegible]月[illegible]

[illegible]

[illegible]宗[illegible]

[illegible]

[illegible]人心[illegible]

[illegible]人[illegible]

夜雪　京この峰のさらに[illegible]月[illegible]

江川海辺　新雨雪　公[illegible]のおりなる[illegible]霞のおもて[illegible]

人の[illegible]雪[illegible]　一枝ともに[illegible]の[illegible]

夕立雨　枝[illegible]の夕[illegible]

関路雪　秋[illegible]の[illegible]汀の桜[illegible]

春雪　[illegible]の木[illegible]桜[illegible]

〃　[illegible]の[illegible]一本[illegible]心[illegible]

新路雪　[illegible]のた[illegible]

名所雪　[illegible]

花雪　[illegible]

水辺山花　[illegible]小舟[illegible]

寄雪　[illegible]小舟の[illegible]

江辺春雁　[illegible]江の[illegible]

寄春山　[illegible]京の[illegible]月[illegible]

〃　[illegible]

河辺春雨　[illegible]

春月　山[illegible]の[illegible]

杜丹　[illegible]

暮春雪　[illegible]

春恋　[illegible]

春雪　桜[illegible]心[illegible]

〃　春[illegible]の[illegible]

夜雲　宵のまの峰のよそ雲はれて又雲はれゆく月そさやけき

名所雨を
霰中雲　山雲のおりゐる峰の霞のおくにさくらまよへり

人のよする雲
とりて雲を　一むらのおほろにかゝる雲なれやおのかもちとも咲く花そなき

夕春雨　桃の花さかりの下陰の夕暮に春雨ふりてそてそぬれける

田家落花　秋あらぬ田面の夕くれに花命つくる汀の桜ちるらむ

花雲　花さかりの木の下桜も雲ふかみさかりのまゝに見る夢の中

い　このまの雪は一本の花はちりつゝ残るまゝの心なれは

新落花　新しきものたちさくら散る雪の情の名残をそふる

名木雲　吹風のちらぬまにさくらの花を霞のしらくもの空

田家春雨　桜ちるかたのまゝに田面の林にきく月をまちける

河上春雨　さみたれの浦に雨のたちこめて江の落花のたゝよふ春の雨

露春し　あめのしたわかれ宵のまの花霧清水のちまた月をみるらむ

い　花霧木の浦にかゝりて花ちりつらむ夕くれ月をまちける

河上春雨　ささなみやあれし花の汀にはあめの花をさそふ春の雨ふる

春夕　山の花ちるまゝの雲林の月ひとく桜のまつ花そちる

杜丹　深見草さくこの庭のもとにありきこえねの蝶のかくれ家

隣家落　水桜かもとのつまに花ちれは隣のかくれ家もちりける

春色　あさな汐を霞に入相のつゝむ舟路そのかよふ

春思　桜さく空にうつろふ花をしりつゝきくかひの心かなしき

い　春深き山ふかみにうつろへる花の色の衣をさそふ春そさりける

春雨　あかるみゆきる夜なりて　春雨も絶月夜を心ゆくかな

春舟　三浦やささちやあり乙佐人のつまつ霞汐路ゆく舟はなかし

い　春雨と霞む浦ことに舟は天の川原やおもひ来まし

春日　紫のゆかりのさき春のいそぐ日数のゆのかしこまる

やよひつくる日
花のちるをみて

人とのく情なくて落花のくは我やさらにはなくもあらし

三月尽　春行る末の花をとゞめかねてかへるさに[illegible]

雨後落花　にほひつゝ雨の名残のおちの落花のせてなかる舟

春月　笑のかほ[illegible]花にそへて桜の葉[illegible]

春月[illegible]ちつゝ[illegible]
[illegible]とけらし

霞　[illegible]のさとの[illegible]春[illegible]

花のちるをみて[illegible]桜の
[illegible]
[illegible]

袖の香[illegible]心[illegible]の[illegible]

今の[illegible]情[illegible]

春草　[illegible]のゝ[illegible]秋[illegible]の春[illegible]の草

深山帰雁　人[illegible]の[illegible]かね

河上霞　水[illegible]霞[illegible]

霞中帰雁　帰雁[illegible]八重霞[illegible]山[illegible]

山林帰雁　[illegible]の[illegible]に[illegible]

田家春月　[illegible]の[illegible]大[illegible]

落花　[illegible]の[illegible]桜[illegible]

帰雁　[illegible]の夕[illegible]の[illegible]

[illegible]　[illegible]桜[illegible]

い

花下夕月　夕まぐれわかれしハきえてちりつきし花の下こそ月を霞める

花宴似美人　たをやめか袖ひるかへす心して庭の桜ちらしをなし

情景春　やよひのはなもかりし千鳥春らかなる春をまつらん

春田家　鶏なくたなかの田畔と夜ゆくゆく月夜田家の俤

江上春　舟清ひらくこそ春のもの月春の寺くらしゆくこのしま

山路雨　おもしろき橋ふもと春さく山路に春ハ静なる道こそおくのまち

梨雨　ふりそそく雪かと人のまち春といふ文字にたらひハわかなる

[illegible]　春のまた風の[illegible]人の春のもとこそをしや

[illegible]風雨　春のまた風の[illegible]人のなきに[illegible]をしめかと

江上雨　江のなひの夕ぐれ静かなりて霞の奥に春の[illegible]

山路雨　橋ちるつかひにたえ残る[illegible]かなりの

雨中情景　吹風に静かなるものまことにて雨やそそくねまに春の[illegible]

[illegible]　俤夜の月とまひとの木にのぼられしも春のこゑの[illegible]

[illegible]　[illegible]の[illegible]のさかりの

[illegible]　[illegible]このまに[illegible]さらにまたしらぬのことを[illegible]

杜鵑　[illegible]のたえはしや山花とてまたかへりて春のしめ

[illegible]　[illegible]の橋本橋うてそてし雨降なる子風さえ[illegible]

[illegible]　なく[illegible]なくと雨と風との中やまり

春月　雨の[illegible]夕ぐれそひの夜をてらしたりて[illegible]

[illegible]　へむさきの人のそなたの心にしてまことにいるとをなし

蹤

跡　古本所の松にて数寄者にあふにつけしの

古雅なる和歌の神か宮とも記しの本説にまりのさね

跡なき二日ばかりをふかく和の古き事はもとなかり

今のさくら
のおもとにて
かく詠ありて一ときもうかりける人の世をこそ

月とり
きく夜　古雅なる物にもあはれ人さまさまなれば月の影

大槻文庫